月刊 まち・コミ 2009年1月号

● インフォメーション ●http://park15.wakwak.com/~m-comi/

● 今月の注目記事 ● Ｐ１～Ｐ５　十四年目の慰霊祭

十四年目の慰霊祭

一月十七日が巡ってきた。御蔵北公園モニュメントを囲んで自治会主催の早朝慰霊法要を行った。但し自治会主催は早朝の一回だけに終わった。北公園の慰霊モニュメントが出来て次の年からはペットボトルにローソクを入れて毎年朝夕二回、五時四十六分に合わせて通称“ろうそく法要”を営んできた。今年の午後の部はまちの有志で行った。一部の御遺族から地区を離れて早朝に参列するのはむずかしいと聞き、僧侶の方と相談して朝夕の二回法要になって数年です。朝の法要でおつとめをして頂いた僧侶の方々は第一回から続いている全国曹洞宗青年会歴代執行部の方々が、前泊で、秋田、宮城の東北から関東、中部、近畿、中国、九州に及び集合。震災当時の混乱を思い起こし、満を持して翌日早朝の法要に臨んでおられる。皆さんは震災直後に全壊の庫裡、使用不能の本堂、唯一残った研修道場三階を提供された八王寺さんを拠点に「炊き出し」活動は避難所や公園で、全国各地寺院の応援を得て多い時は一日三十カ所余、約二万食を新鮮な野菜を使った温かい汁物は被災者にとって旱天の慈雨だった。その後拠点を同じ兵庫の真光寺さんに移し、八月に御蔵に落ち着いた。当地の慰霊モニュメント“鎮魂”の文字は皆さんのお力に依って、前永平寺管長宮崎亦保禅師さんに揮毫していただいたものだ。

夕方の部は兵庫県の丹波、但馬の方々で代替わりしておられる方もおられるが初回より参加している方もおられます。今回参列者が少ないにも拘わらず皆さん全身全霊を打ち込んで読経は参列者の心を打った。またこの地で初回より長年先導役を務めていただいて、今は東京八王子に居を移された藤井隆英師、そしてまち・コミ初代代表で今は箱根湯本正眼寺住職小野宗幸師にも朝夕のおつとめいただいた。そしてここ三年、丹波市立大路小学校の児童の皆さんが廃ローソクを集めて作って頂いて「命を大切にします」「１．１７を忘れない」の文字が書かれたローソクも花を添えた。（田中保三）

次ページから、今回ご参列くださった僧侶の方々から寄せていただいた、法要への思いをご紹介します。

●熊本県上天草市
地蔵院　荒木正昭師

「震災から
14年の時が流れて」

阪神・淡路大震災の慰霊祭に今年もお参りさせて頂いた。あっという間の14年間、ご身内を、そして知人を亡くされた方々の思いはあの日あの瞬間に止まったままで別の時間が足早に過ぎていく。生まれて初めて神戸の地を踏んだのが震災直後の全国曹洞宗青年会による炊き出しだった。その年の秋から兵庫区・長田区と兵庫商会田中保三社長様のお力添えで幾度となく集会場等での法話や、仮設住宅でのボランティアのお手伝いをさせて頂いた。今では年に一度の1月17日の慰霊祭にお参りすることしかできないが、遠く離れた熊本の地から見るからこそ見える震災直後から一月ごと、そして一年ごとに変わっていく人の心や街の姿がある様に思える。それぞれの時にそれぞれの苦しみや悩みがあり、震災を受けない人にもそれぞれの苦しみや悩みがある。その中心となる難しさは人間関係にあるのかもしれない。いつも考え方や意見の中心に自分を置かず、自分の都合を後まわしにして協力しよう、その美しさとその難しさが入れ混じっているのが娑婆世界なのかもしれない。自分も含めて頭じゃわかっているがなかなか難しい。自分の我欲の世界、それでいてなかなか捨てたものではない世界、お釈迦様は「人生は苦」だとはっきり説いておられる。多く人との出会いがあり逆に被災された方々に生きる勇気を頂いたり学ばされた方が多いような気がする。

●宮城県仙台市
玄光庵　伊串泰純師

「七夕の願い」

仙台市青葉区通町玄光庵副住職の伊串泰純です。私と御蔵地区の関係が深まったのは、震災の翌年の夏です。田中社長さんやＳＶＡ東京事務所からの依頼で、御菅地区の夏祭りに仙台七夕を飾ったことに始まります。仙台七夕は、８月８日まで飾るので10日の夏祭りには間に合わないということで、仙台の北部の古川市（現：大崎市古川）の商工会議所や大崎トラック協会の寛大なご配慮、また、宮城県曹洞宗青年会会員の皆さんの募金活動等に支えられて、10本の七夕飾りを菅原市場跡と御菅第二住宅建設予定地に飾ることが出来ました。

古川の七夕祭りに田中社長をお呼びして、現物を見て頂いて、ユンボで掘った穴に直径300㎜のビニルパイプを埋め込んで土台を作りました。実際に飾り付けをした経験の有る宮城県の方や、我々宮城のお坊さんの有志が、仙台に住んでいてもやったことのない飾り付けを写真と記憶だけを参考にして飾りました。宮城より数倍暑く感じる神戸の夏の日差しを共に浴びながら汗だくで行いました。

翌日の神戸新聞の第１面を飾り、御菅の仙台七夕が紹介されました。遠く仙台や古川から現地に来られない市民の願いを短冊に吊し、御菅の住民の方々が一日でも早く元の元気を取り戻せますようにとの願いとが一緒になって、夜空に飾りがはためきました。

今でも、当時神戸に集まったスタッフとは顔を合わせると、懐かしい思い出のように語り合います。そして、今の神戸は元気に頑張ってるかと訊ねられます。

私は、毎年、１月17日に、全国曹洞宗青年会の有志と「鎮魂の会」という名称で集まっ

て、モニュメントの前で読経しております。未だに被災者の皆さんがあの朝を忘れることなくお焼香する姿を拝見すると、震災の怖さ・人的並びに精神的に被った被害の大きさを感じ、私達の読経の声が少しでも安心を与えられるなら幸いに存じます。

●島根県能義郡
洞光寺　池上幸秀師

「生きぬくことの美しさ」

「鎮魂」のモニュメントが建てられた前の年から、全国曹洞宗青年会広報委員長として取材のため、当地を訪れたのが最初でした。その後、当時の執行部として一緒に活動した先輩老師方と共に毎年１月１７日早朝の慰霊法要に参加させて頂いています。“七人の侍”ならぬ“七人の僧”は、年に１度顔を合わせ、近況を語り、また青年会時代の思い出を熱く語り合い、神戸市御蔵の地で被災殉難の諸霊に回向し、ご遺族や地域の皆さまのご平安を祈っております。

私のお寺は、戦国大名月山富田城主尼子経久の開いた寺です。尼子一族は台頭してきた毛利氏によって滅ぼされてしまいますが、尼子氏の家臣山中鹿介幸盛（やまなかしかのすけゆきもり）という武将が主家の再興を願って奮闘します。織田信長に頼ったりもしましたが想いを果たせぬまま囚われの身となり、三十四歳で暗殺されてしまいました。文武に長け勇猛であった鹿介は毛利方からの誘いも度々あったのですが、尼子家の再興にこだわり続け、故郷富田荘（広瀬町）に帰り平穏に暮らすことを願い続けていました。三日月に手を合わせて祈る、祈月の鹿介像は私の町のシンボルになっています。「願わくは我に七難八苦を与え給え」と自らの運命に負荷をかけ、難苦克服の生涯を送った生き方は、「忍ぶ」とか「耐える」ということが苦手になった現代人に今日でも、示唆を与えてくれています。

結果はどうであれ、高い志（こころざし）を立て、生きとげることは、死にきること、死にきってこその人生だと教えられます。私は、御蔵の皆さまに、たとえ目標を達成できなくても、生きぬくことの美しさは、五百年後の今日でも伝わるものだということをお伝えしたいと思います。

●埼玉県川口市
光音寺　小林眞悟師

「一心不生萬法無咎」

『まち・コミ』の皆様、此の度は、このような機会を頂き、有難う御座います。

阪神淡路大震災は平成七年でしたが、私が御蔵の町に関わりましたのは、全国曹洞宗青年会（以下『全曹青』）第十一期執行部に入った為に参加した一周忌の震災法要からでした。震災の大変な時期に神戸でボランティア等に参加していない私は、一周忌の前日にかなりの引け目を感じて神戸に参りました。私は「今さら何をしに来た」と云う言葉をいつ言われるかと気にして居たのです。仏教は亡くなった方をどうにかする宗教ではなく、どう生きるかを説く教えです。私の為に「皆が困っている時に何もせずに何が仏教か」と言われる事を心配し乍ら、一周忌や花祭りや三回忌に隠れるような気持ちで参加させて頂いて居たのです。

全曹青十二期の二年間は執行部を外れた事も有り、これ幸いと一月十七日に神戸には参りませんでした。しかし、間違った考え方をしていると気付き、考え方を改め、十三期で再び全曹青に関わったご縁で、それ以降は平

成十七年に欠席になったものの、こちらの震災法要に十一回参加させて頂きました。

「どうして態々お金を使ってまで神戸に行くの」と友人等に訊かれる事が有りますが、「出来る時に出来る事をやって来るだけ」と答えてます。　合掌

●秋田県本荘市
東林寺　佐藤道昭師

「自分にできること」

私が１．１７震災法要に参加させていただいたのは、3年目の1998年からで、多分現在の参加者の中では一番の新参者であり、被災以後の状況もテレビや新聞で知る程度でしかありませんでした。

きっかけは1997年に全曹青執行部に携わって、前述の菅原市場前の法要に参加した事であり、被災直後のボランティアに尽力された他の方々と比較するに付け、引け目を感じていたものです。

しかし今でも毎年参加させて頂くようになった理由は、4年目法要の時、全体法要が終わった後ご遺族の方の依頼でそれぞれの場所に赴き亡くなられた方のご供養を瓦礫の残る現地で行ったとき、ご遺族の方から涙顔で「本当に有難うございました」と言われたとき、『自分に出来る事は、これなのかも知れない』と思ったのでした。また、田中さんやまち・コミの皆さんに初めてお会いしたときから、復興やケアに対する熱意に惚れ込んだのも大きな理由でした。

その後、全曹青を引退しても尚、『私が出来る、神戸に対する些細なご奉仕』を続けさせて頂いております。多分これからも、毎年拝みに来る事だろうと思います。それが亡くなられた方々の慰霊と、残された方々の心の安らぎに、微力ながらお手伝いできる事であろうと信じています。

●兵庫県丹波市
観音寺　平岩浩文師

「こころの復興」

平成七年、当時上の子供はまだ二歳、二番目は生後十七目。

二階で寝ていたこともありかなりの揺れを感じ、子供に覆いかぶさり、寒いながらも窓を全開にした記憶がのこっている。外がうっすらと明るくなってきたころ、長田の弟子に電話を。怪我はなかったものの、建物は全壊とのこと。その後、言うまでもなく弟子との電話は不通。関西は、神戸はとんでもないことになっているとの報道に自坊（自分の寺）にいたるところから電話があったらしい。それも不通で、さぞかけていただいた方々は心配だったろう。あれから丸十四年、当時、自分は僧侶としてでなく人として、炊き出し等で出向いていった。荒れ果てた街、信号機も点滅の無法地帯、人の心か一つにならず沈んで行く、青年僧侶の呼びかけの慰霊法要、悲しみの中にもようやく人として歩き始めたような気がした。その後、街は地震の被害はなかったように変わり、人は悲しみを時間という薬で治しつつあった。しかし、もうあの日のことは忘れたい、そんな声も最近耳にした。月日の流れだろうか。思いだしてあげる心、あなたのことは忘れていませんよ、この心、気持ちが唯一供養ではなかろうか。

今年もまた、七人だけになったが「鎮魂モニュメント」の前で名の供養させていただける感謝をかくせない。我々僧侶が読経を続け

る事で形あるものではなく本当のこころの復興の大切さを、わすれないでほしい。

●兵庫県篠山市
蔵六寺　片瀬道昭師
（兵庫県第二宗務所青年会会長）

「悔いなく今を大切に」

阪神・淡路大震災の発生から十四年の歳月が流れました。ここに地震によって失われた六千四百三十四人もの諸霊位に、改めてご冥福をお祈り申し上げます。また震災でご家族を失われた方々にとって、心の傷が癒えることはないかもしれません。その悲しみを乗り越えて新しい人生を力強く歩まれることを切望致します。

私は神戸市より北に七十キロ離れた篠山市で住職をしており、震災直後よりこの御菅の地とのご縁をいただいて、毎年慰霊法要に参列させていただいております。

年々歳々花相似たり
歳々年々人同じからず

これは中国唐代の詩人・劉延芝の漢詩の一説です。私たちは毎年咲く花が今年も同じように咲くものだと漠然と考えています。桜の花を例にとると、毎年きれいに咲く花であっても、今年咲く花は今年咲く花であって、去年咲いた花ではありません。つまりその年の桜はその年にしか見ることのできない一度きりの桜だということです。人との出会いも同じで、また明日会える、また来月会えると同じ出会いがあるように思っていますが、全く同じ出会いは二度とありません。たとえ同じ人と会ったとしても前と比べてお互い少し変わっているはずです。そして、また会えると思っていても必ず会える保証はどこにも無いのです。

私はこの地で毎年皆様方との出会いを通じて多くのことを学び、思いを新たに致します。これから共に『今』を大切にして、一瞬一瞬を悔いなく過ごしていこうではありませんか。

●東京都八王子市
藤井隆英師

「慰霊の心」

現在、東京八王子のお寺の執事をしております藤井隆英と申します。

私は、震災年11月に初めて神戸に降り立ち、東京に引っ越す3年半程前まで阪神に住み、毎年の慰霊祭を含め、御蔵と様々な関わり方をさせていただきました。東京に行ってからも慰霊祭には必ず駆けつけさせていただいております。

今回の慰霊祭で、親に連れられながらも子供たちが一生懸命慰霊の気持ちを持ち、慣れない焼香を行っている可愛いながらもけなげな姿を見て、私は法要中にも関わらず涙を流してしまいました。慰霊の気持ちというのは、時間が経ったから小さくしたり、どこかで終わるというのでもなく、伝える気持ちさえあればいくらでも伝わり、どこかで終らせてしまうのは自分自身の心に他ならない事をまちの子供や親を通して気付かせていただきました。まずは自分自身が慰霊の心を持ちつづけること。そしてその心を持った日常を過ごすということが、いつも犠牲者の方々に見守っていただいている中で、これからの皆様自身、そしてまちにとっても必ず良き流れになると実感しました。

まちでは様々な問題があるとお聞きしております。しかしながらまずは慰霊の気持ちを持ち続ける自分自身の心を大切に、毎日をお元気にお過ごしください。

阪神・淡路大震災　語り部からのメッセージ　第４回

御蔵通5丁目にある鉄工所が被災した　竹内 千恵子 さん

語り部が活動を始めた当初から、今もずっと語り部として修学旅行生などに話をしています。やろうと思ったきっかけは、大震災の被害を受けてから、後に続く人たちに何か残さないといけないと強く思ったことでした。日本は地震だけに限らず天災が起こる国ですので、ちょっとでも知識を持っていれば咄嗟の判断ができるのではないかと思います。体験していれば尚更ですが、少しでも耳にしていれば何か違うと思うのです。昔は地震が来たとなったら「机の下に入れ」とよく言われていたと思いますが、そうではないんですよね。その時その時の状況によって対応も変わってくると思います。街を歩いていれば上から割れガラスが落ちてくることもあるし、家が倒壊して下敷きになってしまうこともあります。やはり、そういったことを少しでも頭の隅に置いていてもらえれば、いざという時に適切な判断ができるのではないかと思うのですね。だから、語り部さんの話を全部とまではいいませんから、一つでも心に留めておいてほしいなと思ってます。

それともう一つ、私がよく皆さんに伝えることがあるんです。それは命を大事にしてほしいということです。自分の命を大事にする人は、やっぱり他人の命も大事にすると思います。よく学校でいじめや自ら命を絶ってしまうといったことを聞きますが、おじいちゃんおばあちゃん、お母さんお父さんからずっと繋いできた命を大事にしてもらいたい。命は自分一人だけのものではない、いかなる災難に遭おうとも必ず命が守れるよう学んでほしいです。

語り部を続けてきて嬉しいこともあります。お礼の手紙や葉書が届くということです。やはり、全員が全員話を聞いているわけではないですが、今日も50人、明日は150人が来て、誰かの心に届いてるかな？　理解できたかな？　と、未知数の喜びも感じます。また、なかなか若い世代の子たちと話す機会もないので、いい刺激にもなりますしね。

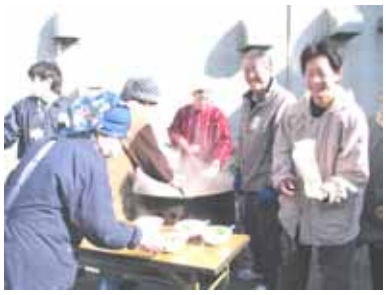
逆に語り部をしていて難しいことも、もちろんあります。修学旅行生などにお話をしますので、時間が決まっていることが多いのですが、なかなかその時間内に自分の全ての想いを話しきることができないことです。また、プロではありませんので、言葉がすっと出てこないこともあります。それは、時々語り部で集まって研修をして話し方などを考えたりしています。今でも私は上手に話をすることがなかなかできません。話下手なんですけど、それでも前向きにやっていこうと思っています。人間はプラス思考が大事ですから。そのプラス思考のなかに、人を思いやる気持ちなどを忘れずにいたいと思っています。

【取材　専修大学　牧山リサ・山田智幸】

まち・コミnews

こうべあいウォークを炊き出しで応援

1月11日に、4回目となる「こうべあいウォーク」(こうべあいウォーク2009実行委員会主催)が開催されました。参加者はＪＲ鷹取駅から南東へ徒歩5分のところにある大国(だいこく)公園をスタートし、長田の各所を解説付きで回り、まち・コミでゴール。震災学習の語り部メンバーが、ゴール地点で豚汁を提供しました。



防災科学技術研究所の調査実施中

昨年末にお話しをいただき、今年の１月から３月初旬にかけて、独立行政法人防災科学技術研究所(茨城県つくば市)のヒアリング調査を受託しています。

阪神・淡路大震災被災者の生活再建過程についての調査で、2008年末時点での被災状況、復興状況など生活再建過程全般に関することをインタビューし、その内容をまとめています。今年度の調査は３月で終了しますが、来年度以降も継続される予定です。

大地のつぶやき

〜吹き荒れる経済不況と震災〜

メーカーへのライン納入部門が生産調整により大きく売り上げが落ちている。また輸出部門も円高に翻弄され半減を余儀なくされ、吹けば飛ぶ小規模のオヤジとしては何としても社員とその家族の生活を守る義務だけは果たしたい。勿論仕入先、得意先とも共存して信頼関係を破ることなく。前述二部門だけでなく、本流である一般市販の自動車部品関連部門も得意先とする自動車修理業、同板金業、タクシーや運送業者の不振に連鎖して予想以上のダメージを受けている。如何斯くも景気の悪化が深刻化したのであろうか。米国の金融危機が発端であることに違いないが、原油高騰に連動するガソリンの高騰がある。それも暫定税率の期限切れで一度は値段を下げておいて、元に戻るや否や矢継ぎ早の上昇だ。どこかで溜を拵えるならまだしも、これですっかり消費者の心胆を寒からしめた。原油も最高値からすると今は四分の一近くに下がっているが、ガソリンは半値も下がっていない。税が固定だから比例しないは分かるが、一方軽油の値段がガソリンと殆ど変わらない不思議。一体どうなっているんだと言うのが消費者の心理で、もう騙されないぞが本音だ。値上がり前より安いと思うがセルフのスタンドで満タン入れる人が少ないと言う。『羹に懲りてなますを吹く』消費者心理だろう。バブルがはじける迄は国の基幹産業は建設業が引っ張っていたがその後の建設業は誠に厳しいもので、今尚その渦中にある。建設業に替わってやはり裾野の広い自動車産業があっという間にこうなるとは考えもしなかった。

震災は地域が限定されていたが、世界中のこの不況にどう対処すべきか。でも震災の教訓は生かしたい。先ず金融不安を打ち消した当時の日銀金融特例措置法による「安心感」がある。また避難所での「奪い合えば足りない、分け合えば余る」あの精神、心の置き所を今一度思い起こしてこの苦境を乗り切りたい。

株式会社兵庫商会　田中保三

まち・コミ活動報告　12/1～12/31

12/2　研修受入
（JICA研修「JICA-NGO連携による実践的参加型地域開発コース(A)」）
12/2　修学旅行お疲れさま会
12/4　インドネシアから来客
12/6　まち・コミ打ち合わせ
12/6　研修受入（まち歩き実践ゼミ）
12/7　出張講演（「災害に強いまちを目指して～地域の安全は誰が守る？見直そう地域の力～」さいたま市市民活動サポートセンター・田中）
12/8　まち・コミ運営委員会
12/10　第4回中国語勉強会
12/11　ｉウォーク下見参加
12/11　まち・コミスタッフ打ち合わせ
12/14　大阪市立芸術創造館へ（松原副館長）
12/18　フィリップモリス報告会
12/19　インドバイオトイレ打ち合わせ
12/19　駒澤大学にてインドカレーパーティー参加学生と懇親
12/24　月刊まちコミ印刷
12/25　月刊まち・コミ発送作業
12/27　防災科学研究所ヒアリング打ち合わせ(遊空間工房)
12/31　まちコミ大掃除

ご支援、ありがとうございます。　12/1～12/31

●賛助会員(新規・継続)●

西堀喜久夫(福岡県)　渡辺正幸(茨木県)　まつしまハル(熊本県)　長畑誠(東京都)　山田理恵(東京都)
辻野芳郎(兵庫県)　難波健(大阪府)　鎌田啓通(徳島県)　和田幹司(兵庫県)　寺門征男(千葉県)

●協力●

社団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都)　株式会社兵庫商会(兵庫県)　　【順不同・敬称略】

新規賛助会員募集＆更新のお願い

まち・コミでは、さらに活発に活動を行うため、賛助会員を募集し、金銭面でのご支援をいただいています。会費は、事業推進のために活用させていただきます。賛助会員のみなさまには、会員特典をご用意しておりますので、ぜひ賛助会員への登録をお願いいたします。

また、賛助会員は１年更新とさせていただいています。現在賛助会員の方も時期がきましたら、更新をお願いいたします。（期限は、「月刊まち・コミ」郵送時の封筒の、宛名の下に記載していますので、ご確認ください。）

会員特典

◆本誌「月刊まち・コミ」の送付。
◆まち・コミュニケーションに関する、Ｅメールでの情報送付、WEBの特別ページの参照

よろしくおねがいいたします。

■編集後記　99年３月ごろまでの震災復興の大変な時期に、まち・コミスタッフとして活躍された浅野幸子さんが今年１月ご結婚されました。お幸せに♪(戸)

年会費

個人・法人　年間５０００円
学生　　年間３０００円

郵便振替口座番号

００９５０－３－４２７８８

口座名称

「まち・コミュニケーション事務局」

2009年１月２５日発行
編集／発行　まち・コミュニケーション
定価　１００円
御蔵事務所　〒653-0014
神戸市長田区御蔵通5-5
TEL　078-578-1100／FAX　078-576-7961
東京事務所　〒162-0052
東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部浦野研究室内
神奈川事務所　〒214-8580
神奈川県川崎市多摩区東三田２丁目1-1
専修大学文学部大矢根研究室内
e-mail　m-comi@bj.wakwak.com
URL　http://park15.wakwak.com/~m-comi/